

西田 光一 NISHIDA Koichi

研究分野：理論言語学、英語学、特に語用論

キーワード：指示、照応、定型表現、話し手個人のメッセージ



研究トピックス：

文脈の再現、話し手の顔が見える言語研究

研究の要旨：

ことばには、当該言語の体系で決まっている部分と、話し手が自由に動かせる部分があります。前者の代表は単語の発音と文法です。例えば、英語で猫のことを言う場合、cat を[kæt]と発音しないと通じません。話し手は自分の好きに cat を[kot]のように発音することは許されないわけです。ちなみに、ロシア語ではオス猫のことを kot と言います。また、文法も体系的に決められています。英語で「私は家で猫を飼っています」は I have a cat at home. という文になりますが、英語の文法では I at home a cat have. や I a cat have at home. といった語順は認められません。従来の言語研究は言語の体系を明らかにすることを目標とし、話し手が自由に手出しできないことばの特徴が主な対象になっています。これは研究の体系性という点では極めて有用ですが、これでは話し手の個性が見えてきません。もっと言うと、音声学や文法論は英語や日本語といった言語の骨格にあたる部分を相手にしていても、その言語の話し手が全員、規則的に従うところを扱って、個別の話し手の顔は見ないようにしているわけです。

一方、ことばで話し手が自由に動かせるところは、どこでしょうか。日本語の身近な例では、「今日は雨です、今日は雨だ、今日は雨だぜ、今日は雨ざます」など多様な文末表現があり、その選択で誰が誰にどう話しているか文脈が再現できます。同じものを指すのにも言い換えが効くこともあります。味噌汁は「お味噌汁、おみおつけ、おつけ」などとも言えて、それぞれ話し手のイメージが変わってくるでしょう。ことばは、単語の発音や文法といった言語の骨格から離れれば離れるほど、話し手が自由に換えられる部分が増えます。言語体系を重視する研究から見れば周辺的で、些末的でさえあることばの使い方こそが、一人ひとりの話し手が自分の個性を表現しようとする際に重要になってきます。私は、音声学や文法論の基本を踏まえつつ、個別の文脈を再現し、個々の話し手の顔つきが見える言語研究に取り組みたいです。

院の授業では、ことばあそびや広告表現を題材に、ことばの使い方の仕組みを探究します。受講には、身近なことばに対する関心があれば十分で、言語学の予備的な知識は不要です。

主な関連業績：

“An anaphora-based review of the grammar/pragmatics division of labor,” Proceedings of the Forty-Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: 213-227. 2019年.

「談話内のことわざの代用機能とグライスの協調の原理の再評価」『語用論研究』20：41-61. 2019年.

「代名詞の指示対象から見た対人配慮の日英対照」山岡政紀（編）『日本語配慮表現の原理と諸相』：第11章、183-198、くろしお出版、2019年.

「英語の広告における定名詞句の表現効果」『英語語法文法研究』26：57-72. 2019.

[教員紹介へのリンク](#)

[教員データベースへのリンク](#)